

# 十字路

最近「悪い円安」が流行語になった。たしかに円安は輸入物価の上昇を増幅して、国内のインフレ圧力を高めるため、消費を下振れさせ景気にもマイナスに作用する。

しかし、ついこの間まで「円高は悪い、円安はよい」という常識が支配的であった。円高は日本からの輸出環境を悪化させ、輸入物価の低下が国内のデフレを深刻にする。一方、円安になれば、これと逆のことが起こる。

悪い円安という言い回しは、基本的には円安はよいこと、というニュアンスが隠れ

## 円安によいも悪いもない

ている。今は悪い円安論が広がっているが、また円高が進めば、円高は悪いという考えに戻りそうだ。

たしかに、資源価格が高騰している時に円安が進むと、輸入物価が一段と高騰し、国内のインフレ圧力の高まりに拍車をかける。だから悪い円安という指摘にも一理ある。しかし、今の物価上昇は資源価格の高騰が主な原因だ。

ところで資源価格の高騰と円安が重なったのはなぜか。円が最高値を更新してきたのは過去の話だ。2011年の東日本大震災以降、日本の巨額の貿易黒字が続かなくなり1985年のプラザ合意以降の円高トレンドも終わった。日本の輸出競争力が低下し

て円高が続かなくなっているところに、資源価格の高騰が重なれば、貿易赤字が拡大して、円安が進む。

為替が日本経済を左右するのではなく、日本経済の実力が為替に反映される。円安がよいか悪いかという水掛け論は卒業して、日本の競争力低下を警告するシグナルとして円安を捉える時だ。

悪い円安論を振りかざして日銀に利上げを迫っても競争力は高まらない。民間企業を中心に社会全体の取り組みによって日本の競争力が高まってくれば、円安圧力は後退し成長力も高まってくる。  
(三菱UFJリサーチ&コンサルティング)

研究主幹 鈴木明彦